

ジュニアリーダー活動の効果性と課題の検討

有川 かおり

1 問題の設定

青少年活動をめぐっては、様々なセクターが、多様な教育プログラムを展開してきた。古くから行われてきたものには、全国各地で行われてきた青少年の集団活動である「子ども会活動」「ジュニアリーダー活動」「ボーイスカウト・ガールスカウト活動」「青年団・少年団活動」などがある。これらの活動については、田中（2015）において、「1970年代を通じて会員数を増加させた青少年団体」であったが、「1980年代は逆に減少に転ずる団体が目立ってきた」、また特に「スカウト系3団体（ボーイスカウト、ガールスカウト、海洋少年団）および全国子ども会連合会（全子連）にこの傾向が顕著である」と指摘されている。このことから、青少年の集団活動自体が衰退してきていることを明らかにしている。一方で、数自体は減少しているものの、現在も全国各地で様々な実践や研究が行われている。しかし、体系的な取り組みや、構造的な把握ができないまま実践や研究を終えてしまっているケースも多い。そこで筆者は、青少年活動に関する事例の一つとして、「ジュニアリーダー活動」を取り上げ、ジュニアリーダー活動に関わった青少年が、活動に参加する前と後でどのように変化していったかを調査することにより、筆者の研究課題である、「ジュニアリーダー活動の効果性と課題の検討」の手がかりを得たい。

尚、ジュニアリーダーとは、町内会の子ども会や行政が管轄する青少年団体の総称を意味する。地域によって異なるが、おおむね13歳から22歳の青少年を指す。レクリエーションゲームやキャンプ等の体験活動の指導を通し年少者と関わることによって、地域の大人と年少者の懸け橋になることが期待されている。

2 ジュニアリーダーに関する先行研究

国立情報学研究所のCiNiiによれば、2015年10月20日現在「ジュニアリーダー」のキーワードで、21件が検索できる。そのうち14件は、『社会教育』や『青少年問題』といった、専門誌に掲載されたものであり、全国各地の活動事例紹介がその中心である。

しかしこれらは、実践事例の紹介にとどまっており、他

の地域のジュニアリーダー活動との比較分析や、ジュニアリーダー活動以外の青少年の集団活動との比較分析は行われていない。

専門誌に掲載されたもの以外の論文に着目すると、事例を比較検討した論文も存在する。遠藤（1997）では、少年教育行政における子どものリーダー養成に着目し、東京都23区のジュニアリーダー養成事業について、詳細な調査が行われている。ここでは、少年教育行政における子どものリーダー養成に着目し、東京都23区において調査が実施されている。結果、「ジュニアリーダー養成事業はほとんどの区で実施されているにもかかわらずその全貌が把握されていないこと」「養成したジュニアリーダーたちの活動場所在が充分でないこと」「講習会のプログラム自体にジュニアリーダーの参画が少ないこと」など、その時点での課題が明らかになった。また、遠藤（1997）の6年後に行われた追跡研究、遠藤（2003）では、「行政と青少年団体との連携が明らかに薄れてきていること」「財政的に縮小傾向」にあることをあげている。また、「青少年リーダーの地域での活動保障とその役割を重視し、子どもを地域の一形成者として位置づける」ことが、重要な課題であると指摘している。

以上のように、子どものリーダー養成の課題について遠藤は指摘してきた。しかし、遠藤の論文は10年近く前の論文であり、その後は事例を比較分析している論文は無い。

本論文でジュニアリーダー活動を取り上げる理由は以下の2点である。

1点目は、日本全国の地域社会で行われてきた青少年の活動の1つであるという点である。前述のように、現在は活動が活発ではない地域も多いが、その活動は北海道から沖縄県まで広がっている。しかし、日本全国の地域社会で行われてきた活動であるにもかかわらず、研究が充分に行われていない。また、その大半を実践報告がしめ、効果性や課題が十分に検討されていない上に、数自体も少ない。したがって、活動の効果性や課題を検討する価値がある。

2点目は、ジュニアリーダー活動自体が、青少年同士の学びあいと年少者の育成を並行して行っている点である。この活動では、青少年自身によるプログラム立案、年少者

の指導を行うことにより、年少者が新たなリーダーとして育成されている。そして育成されたリーダーが、またさらに下の世代を育成するというサイクルが成立している。このサイクルは、青少年が世代を越えて学びあっている一例である。したがって、ここでの課題を明らかにすることは、他のプログラムを立案する際にも活用することができる。

以上2点の理由により、本論文においてジュニアリーダー活動をとりあげることとする。

3 研究の方法と手順

第1に、東京都23区のジュニアリーダー活動を類型化することにより、その活動実態を明らかにする。

第2に、筆者が活動してきた、東京都練馬区のジュニアリーダー活動に限定して、詳細な事例をとりあげる。ここでは、ジュニアリーダー活動に関わってきた青年リーダーへ、アンケート調査及び、ヒアリング調査を実施する。この調査を通じ、ジュニアリーダー活動に関わった青少年が、活動に参加する前と後でどのように変化していったかを明らかにする。

以上の検討を通じて、ジュニアリーダー活動の効果性と課題の検討の手がかりを得たい。

4 ジュニアリーダー活動の現状

(1) 東京都23区のジュニアリーダー活動の類型化

東京都23区ジュニアリーダー活動は、「少年リーダー研修会」「ジュニアリーダー養成講習会」「青少年地域リーダー講習会」等、様々な名称があり、運営主体も自治体によって多種多様である。

東京都23区のジュニアリーダー活動を、運営主体で類型化した結果、以下の4つに類型化することができた。

1つ目は、青少年委員会と行政のコラボレーション型である。これは、行政が青少年委員会に委託するか、行政と青少年委員会が協働で行っている形態である。7区（中央区、品川区、大田区、北区、荒川区、板橋区、練馬区）がこの型に該当する。

2つ目は、市町村の青少年団体をたばねる団体型である。これは、市町村の「少年団体連合会」「青少年指導者育成会」「子ども会連合会」等が行っている形態であり、子ども会活動が活発な地域に多い形態である。7区（台東区、墨田区、江東区、目黒区、足立区、葛飾区、江戸川区）がこの型に該当する。

3つ目は、民間への委託型である。民間の野外教育やレクリエーションに関する研究所・事業者に委託し、実施している。2区（新宿区、豊島区）がこの型に該当する。

4つ目は、行政単独事業型である。1区（世田谷区）がこの型に該当する。世田谷区では、青少年会館の主催事業として実施されている。

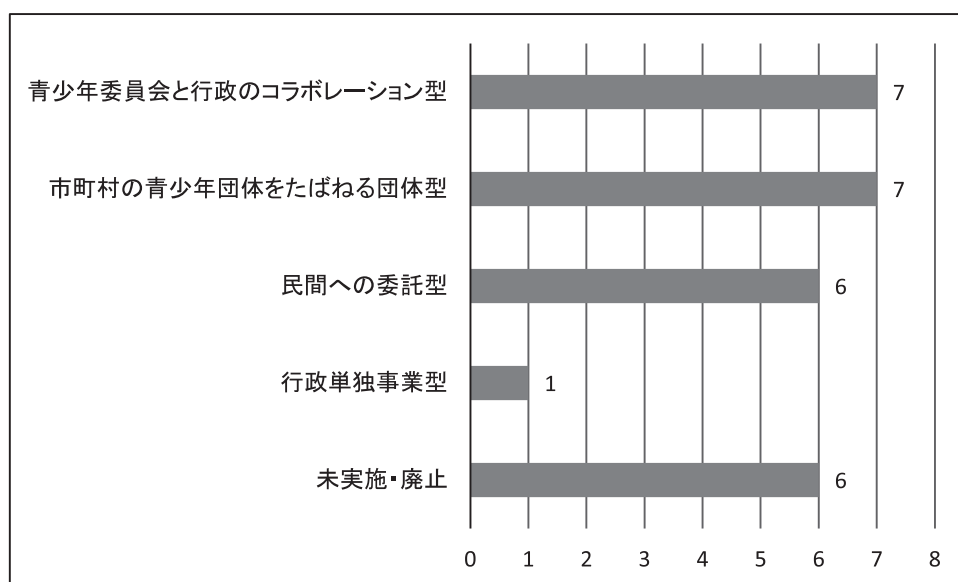


図1：東京都23区におけるジュニアリーダー活動の類型化

注：各区への電話でのヒアリング及び、ホームページの情報を基に筆者作成。ヒアリング及び、ホームページの検索は、2015年10月から12月にかけて実施した。

(2) 東京都練馬区のジュニアリーダー活動概要

東京都練馬区のジュニアリーダー活動についてとりあげる前に、東京都練馬区の概要についておさえておきたい。人口は約72万人（2015年11月1日現在718,929人）で、東京23区の中では世田谷区に次いで2位の人口規模がある地域である。東京23区の西のはずれに位置し、東側に板橋区・豊島区、西側に西東京市、南側に武蔵野市・杉並区・中野、北側に埼玉県和光市・朝霞市・新座市が隣接している。緑被率は東京23区で1位であり、都市農業が盛んな地域である。したがって、畑と住宅が混在していることも特徴の一つである。

東京都練馬区のジュニアリーダー活動は、ジュニアリーダー類型の「①青少年委員会と行政のコラボレーション型」にあたる。行政が練馬区青少年委員会に委託し、小学校5年生から6年生を初級、中学生を中級と位置づけジュニアリーダー養成講習会を実施している。

講習会実施の目的は、「仲間づくりのリーダーとして、地域におけるさまざまな活動において中心的役割を担う青少年“ジュニアリーダー”を養成すること」である。初級は4地区（大泉地区、豊玉開進地区、練馬地区、石神井地区）、中級は1地区あり、4月の開講式から12月の閉講式まで、初級9回、中級10回講座となっている。開講式と閉講式以外は、地区ごとに別々の会場で講習会を実施している。

中級修了者は、青年リーダーとして講習会に参画することができ、多くの修了生が年少者の指導にあたっている。青年リーダーとして活動する者の中には、講習会以外の地域のイベント（子どもまつり、葉かげの集い等）のスタッフとして活動している者もいる。しかしながら、個人的な人間関係で地域のイベントスタッフに加わっているに留まっており、組織的に活動を展開するまでには至っていない。したがって、講習会以外の活動の場が、全ての青年リーダーには無いのが現状である。

練馬区のジュニアリーダー活動は、1975年に練馬区が、「子ども会指導者（成人指導者）講習会」という講習会を、18歳以上の男女を対象に夜間6回講座で行いはじまった。1978年より、練馬区内を5地区に分け活動している。対象年齢も、この時に小学校5年生から中学校3年生という、現在の区分に定着した。1981年には、練馬区基本計画の中にジュニアリーダーの活動スキームが、初めて公的な計画に盛り込まれた。この時に、区教育委員会が独自に企画・運営する形態から、区教育委員会と区青少年委員会が協働

で企画・運営することとなった。年度及び各期の位置づけは、表1の通りである。第1期は1981年度から1983年度で「ジュニアリーダーの発掘と基本構想樹立期」に位置づけられていた。第2期は1989年から1986年で「団体組織化とジュニアリーダーの活動期」、第3期は1987年度から1989年度で「団体育成とシニアリーダーへの移行期」である。

表1：1981年度制定 練馬区基本計画

期・対象年度	位置づけ
【1期】 1981年度～1983年度	ジュニアリーダーの発掘と基本構想樹立期
【2期】 1989年度～1986年度	団体組織化とジュニアリーダーの活動期
【3期】 1987年度～1989年度	団体育成とシニアリーダーへの移行期

注：「平成22年度ジュニアリーダー養成講習会記録」2011年8月練馬区健康福祉本部児童青少年部青少年課発行を参考に筆者作成

その後、最初の受講生が高校生年齢相当になるまでは、東京都教育委員会が主催していた「東京都青少年洋上セミナー¹⁾」の参加者が、青年リーダーとして活動をしていた。しかし、最初の受講生が高校生年齢相当になったタイミングで、受講生も青年リーダーとして活動を展開するようになり、出身母体が異なる青年リーダーが誕生することとなった。

その後2000年までは、「東京都青少年洋上セミナー」の修了生も活動に関わってきたが、同セミナーの廃止に伴いジュニアリーダー養成講習会の修了生と青少年委員のみが講座の運営に関与するようになっていく。そのため、外からの視点が欠け等質集団によって運営される状況に陥り、閉鎖的な組織へと変化してしまっている。この状況を打開しようと、外部講師を呼んで指導者向け講習会等が継続的に行われている。しかし、参加率が低く、同じ人しか参加してこないという課題もある。

講習会自体のプログラムに視点を当てると、筆者が活動を始めた1997年から年間プログラムの柱は変わっていない。また、詳細な内容について見てみても、ほぼ内容が変わっていない。本来であれば、時代の変化や、その年集まった受講生の様子を見て、プログラムを修正していくべきであるが、そこまで至っていないのが現状である。

指導者の一人である、青少年委員に視点を当ててみると、委員のなり手が少なく、次の委員を見つけなければ辞められないという現状がある。したがって、10年以上同じ人が

1) 東京都青少年洋上セミナーとは、年に1回東京都教育委員会の主催で行われていたセミナーである。年間300名以上の青少年が参加していた事業で、大型客船に乗って、親善のため中国などのアジア圏の国々へ訪問していた。

委員を継続しているケースもあり、新規の委員がなかなか入ってきていない。このことも、プログラム内容が固定化している原因となっている。

いておさえた後、実際に東京都練馬区でジュニアリーダー活動をしてきた青年リーダー5名へ、アンケート調査を実施した。またその後、個別にヒアリング調査を実施し、アンケート調査の内容を深めた。調査対象・属性、活動期間、質問項目は表2の通りである。

5 ジュニアリーダー活動への参画を通じての青少年の変化

ー東京都練馬区で活動していた青年リーダーへの調査からー

東京都練馬区のジュニアリーダー活動の概要と課題につ

表2：東京都練馬区でジュニアリーダー活動をしていた青年リーダーへの調査

対象者	K.K	M.M	M.N	M.K	K.A
属性	25歳、男性 システムエンジニア	27歳、女性 公務員(福祉職)	27歳、女性 公務員(福祉職)	29歳、女性 作業療法士	29歳、女性 教育職
活動期間	10年間 (14歳～23歳)	12年間 (11歳～22歳)	12年間 (11歳～22歳)	10年間 (12歳～14歳) (16歳～22歳)	14年間 (11歳～24歳)
活動に関わるきっかけ (受講生として)	友達に誘われたから	キャンプに行ってみたかった。	モノクロのチラシを見て直感的にやりたいと思った。今思っても、何でだろうと思う。	友人に誘われて	キャンプに行きたかった。
活動に関わるきっかけ (リーダーとして)	人前に立って率先して行動できるようになった。	自分がした楽しい経験を、子どもたちに経験させる立場になった。	小学生の時に決めた目標だったから。	受講生を卒業して、自然な流れでなるものだと思っていた。楽しかったから。	リーダーがかっこよかった、一緒に活動したいと思った。
どのような活動をしていたか	小学校5・6年生の指導(レク・キャンプ・集団行動)	キャンプや防災体験などの引率、リーダーとしての企画運営を子どもたちに経験させる。	小学校5年生・6年生を対象とした、キャンプやレクリエーション活動の指導	子どもたちとレクリエーションやキャンプなどの活動をしていた。また、その企画・運営を行っていた。	集団指導、キャンプ指導など。リーダーの地区長として、リーダーと青少年委員のパイプ役
活動をしていく上での困難	リーダーのトップ(地区長)として、子どもだけでなく、高校生以上のリーダーの指導もやったこと。	話し合いを進めていく上で、価値観の違いをすり合わせることに。	学校行事との両立、就活との両立、そもそも部活やサークルを選ぶ基準が、ジュニアの片手間にできるか否かになる。	リーダーとして会をすすめていくことの難しさ、人に伝えることの難しさ	想いの違う人たちをまとめることの難しさ
活動継続のモチベーション	先輩が様々な場面で気遣ってくれたこと、子どもたちの楽しそうな笑顔。	子どもたちの「楽しかった」という言葉や笑顔、仲間と一緒にやりきったという達成感。	同期、先輩(なんだかんだ言って、信頼して見守ってくれる)、後輩(ここで辞めて野に放つのは、後輩に対して失礼、申し訳ないという気持ちになった)、委員さん(頑張れという視線で見守ってくれる)の存在。学校の友人等からは、「すごいね」と意外と評価してもらえる。頑張っている自分も結構好き。	子どもたちの笑顔、周囲の大人から褒められること。達成感、一つの形として、考えたことや企画がすすむこと。人と関わることへの楽しみ。	子どもの笑顔、仲間の支え、委員さんたちの温かさ。一つのことを、本気になって取り組み、結果として他者から評価してもらえたことは、本当に嬉しかった。「また頑張ろう」「もっと良くしよう」というモチベーションアップにつながった。
活動からどんな力がついたか	人前に立って話す力、積極的に挙手する力	人との意見交換、人前で話すこと、立場の違う人との関わり方や社会性、1つのことをやるための仕事の進め方など。	先を読む、逆算する、目標が形になった様子を初期の段階で想像する力。グループの中のボスを見極める力、自分に適した考え方、記録の仕方を習得できた。	人に伝えるときには、工夫が必要であるということ。人に頼ること。コミュニケーション能力	先読みする力、段取り力、想像力、交渉力、効率的・効果的な会議の方法。リーダーの地区長としての活動から、組織を束ねるコツや、どうすれば人は気持ちよく仕事をしてくれるか少し分かった。
活動の経験が今の生活に役立っている点	社内でのプレゼンで人前で堂々と発表することができる。皆が遠慮して挙手しない場でも挙手できる。	仕事での人間関係、仕事の進め方、発想力など。	仕事も大きく言えばグループ活動。特にプロジェクト系の会議は、目標があって開いているため似ている。ただ、先を読めていなかったり、準備不足だったりしていらだったりする。だが、係長級が相手だから、下手に指摘できず歯がゆい。	レクリエーションの知識、子どもたちと関わる時の接し方など、リーダー時代の経験が、そのまま仕事に活かしている。また、複数の仕事を並行して行い、優先順位をつける必要がある時、企画・運営をしてきた経験が役に立っている。	先読みして段取り良く仕事をする。人に気持ちよく仕事をもらうコツが少し分かるので、よく使っている。
現在社会貢献活動をしているか (カッコ内は活動)	なし	なし	なし	なし	あり(消防団)

注：2015年12月23日配付、即日回収したアンケート調査への回答を原文のまま記載した。ヒアリング調査も同日、1人につき30分間行なった。実施場所は、東京都練馬区富士見台にある元青少年委員のH氏宅である。

受講生として活動に関わるきっかけは、「友達に誘われた」「キャンプに行きたかった」「チラシを見て直感的にやりたいと思った」など、自分自身が行きたいと思ったものと、友人からの誘いの2種類の回答があった。一方、リーダーとして活動に関わるきっかけは、「人前に立って率先して行動できるようになりたかった」「自分がした楽しい経験を、子どもたちに経験させる立場になりたかった」「小学生の時に決めた目標だった」「自然な流れでなるものだと思っていた」「リーダーがカッコよかった、一緒に活動したいと思った」といった、自分自身の主体的な決定へと変化している。ここから、たとえ活動の入り口が、主体的なものでなかったとしても、ステップを上げる段階で主体的な決定へと変化しているということがわかる。

活動を続けていく上での困難は、ジュニアリーダー活動自体に関連するものと、ジュニアリーダー活動を継続していくために必要な周辺環境の整備の2種類に分かれていた。ジュニアリーダー活動に関連するものでは、「子どもだけでなく、高校生以上のリーダーの指導も行ったこと」「話し合いを進めていく上で、価値観の違いをすりあわせること」「人に伝えることの難しさ」「想いの違う人をまとめることの難しさ」といった、人をまとめることの困難さが挙げられていた。これは、世代や考え方が異なる人々の意見を調整するトレーニングになっており、後述する、活動からどんな力がついたかという問いの答えと関連している部分も多い。一方、活動を継続するために必要な周辺環境の整備では、「学校行事や就活との両立」「部活やサークルを選ぶ基準が、ジュニアの片手間でできるか否かになる」といったことが挙げられた。アンケート調査の後のヒアリング調査では、「学生時代の学校関係の友人で、卒業後も連絡を取り合うような仲間は少ない」「ジュニアリーダー活動を一緒におこなっていた仲間の方が、頻繁に連絡をとっている」というコメントがあった。ここでは、ジュニアリーダー活動が、青少年の育ちにとって一定の効果はあるが、学校内での人間関係の構築には、つながっていないケースもあることが明らかになった。

活動継続のモチベーションは何かという問いに対して、全ての調査対象者が「人」に関することを挙げていた。活動継続のモチベーションとして、受講生である子ども、青年リーダー仲間の先輩・後輩・同期、青少年委員、学校の友人等の存在について挙げている。受講生である子どもに関しては、「楽しかった」という声や「笑顔」が挙げられており、青年リーダー仲間に関しては、「先輩が様々な場面で気遣ってくれたこと」「同期」の存在・支え、「後輩」に対する責任に関することが挙げられた。青少年委員に関して

は、「頑張りという視線で見守ってくれる存在」「温かさ」といったことが、学校の友人等に関しては、「すごいねと意外と評価してもらえる」ことが挙げられている。一つのことに本気で取り組むにあたり、高め合い支えあう存在がいること、そして第三者からの評価があることがモチベーションの維持につながっていることが、明らかになった。

活動からどんな力がついたかについて、主に4つの柱が挙げられた。1つ目は、積極性をもって物事に取り組む力である。ここでは、「積極的に挙手する力」などが挙げられている。2つ目は、話す・伝える・記録する力である。「人前で話すこと」「人に伝えるときには、工夫が必要であること」など、人に対し適切に自分の考えを伝えるには、コツがあることを学んだと挙げられていた。3つ目は、立場や想いの違う人と関わる力である。これは、受講生である小中学生や、見守り助言する立場である青少年委員との関わりはもちろんのこと、青年リーダー同士の関係の中でも挙げられていた。4つ目は、組織をたばねる力である。ここでは、「1つのことをやるための仕事の進め方」「先読みする力」「段取り力」「効果的な会議の方法」などが挙げられている。

活動の経験が今の生活に役立っている点については、全ての調査対象者が共通して、「仕事に役に立っている」と回答していた。また、回答の詳細についてみていくと、ひとつ前の質問であった、活動からどんな力がついたかという問いの答えと関連している部分が多かった。その中でも特に多いのが、組織をたばねる力である。具体的には、「1つのことをやるための仕事の進め方」「先読みする力」「段取り力」が仕事の中で活用できていると、5名中4名が回答している。これは、青年リーダー同士の学び合い、共に支え合いながら、キャンプやレクリエーションなどのプログラムを立案し、PDCAサイクルをまわしてきたことにより、構築された力であると考えられる。

現在社会貢献活動をしているか、という問いに対し、5名中4名がしていないと回答している。アンケート調査の後のヒアリング調査では、「やってみたいとは思いますが、仕事以外で余裕が持てない」「きっかけが無いが、誘われればやりたいという気持ちはある」といった回答があった。練馬区ジュニアリーダー講習会実施の目的は、「仲間づくりのリーダーとして、地域におけるさまざまな活動において中心的役割を担う青少年“ジュニアリーダー”を養成すること」である。しかし現状は、調査対象者のほとんどが地域で活動しておらず、ボランティア活動自体もしていないことが明らかになった。

以上のアンケート調査及び、アンケート調査の後のヒア

リング調査により、活動を始めるきっかけが、たとえ主体的なものではなかったとしても、ジュニアリーダー活動を行っていくなかで、徐々に主体的なものへと変化していくことが明らかになった。また、活動を継続していく中で、仲間からの支えや評価を得ながら、「積極性をもって物事に取り組む力」「話す・伝える・記録する力」「立場や想いの違う人と関わる力」「組織をたばねる力」といった力を構築していったことが明らかになった。一方で、活動を卒業した後の活躍の場は、必ずしも「地域」ではないことも明らかになった。繰り返しになるが、練馬区ジュニアリーダー講習会の目的は、「仲間づくりのリーダーとして、地域におけるさまざまな活動において中心的役割を担う青少年“ジュニアリーダー”を養成すること」である。したがって、その目標を達成するためには、卒業生が地域で活躍しやすい仕組みを構築しなければならない。また、現役の青年リーダーだけではなく、卒業生も含めたネットワークづくりを進める必要もある。

6 まとめと残された課題

本論文は、青少年の集団活動に関する事例の1つとして、「ジュニアリーダー活動」をとりあげ、ジュニアリーダー活動に関わった青少年が、活動に参加する前と後でどのように変化していったかを調査することにより、ジュニアリーダー活動の効果性と課題を検討することを目的としていた。

今回は、東京都練馬区のジュニアリーダー活動に限定し、詳細な調査を実施した。その結果、ここでつんだ経験や学びは、青年リーダーを卒業した後も、活用できていることが明らかになった。一方で、本来期待されている、卒業後の「地域」での活動はあまり行われていないことも明らかになった。このことから、地域で青少年を育て、彼らが将来的に地域にもどってリーダーになっていくという、古いモデルが通用しなくなっていることは明らかである。しかし、超高齢社会をむかえている日本において、地域は彼らの力を必要としている。彼らが、地域の担い手の一人として、「協力したい」「魅力的だ」と感じるような仕組み・仕掛けをつくること、彼らの力が地域で活かされる仕組みを構造化することが急務であると考えられる。

本論文において、詳細な調査を行うことはできなかったが、ジュニアリーダー活動に関する先進事例の1つに、NPO法人ワールド・ビジョン・ジャパンが東日本大震災直後から行ってきた、「南三陸町まちづくりプロジェクト」がある。これは、被災した宮城県本吉郡南三陸町で行われたまちづくりプロジェクトで、まちの復興にジュニアリー

ダーの意見を反映させようとしたものである。このプロジェクトでは、具体的な提案を町長あてに実施している。これは、地方レベルの、しかも被災した地域の一事例ではある。しかし、まちの復興にジュニアリーダーが参画したことの意味は極めて大きい。今後は、この事例に関しても詳細な調査を行いたい。また、他の自治体におけるジュニアリーダー活動についても、詳細な調査を実施、比較・分析をして、ジュニアリーダー活動の効果性と課題の検討を行いたい。

本稿は、筆者の卒業論文及び、修士論文の内容をもとに再調査を行い作成したものです。卒業論文の指導にあたって下さった、齊藤ゆか先生（聖徳大学准教授）、修士論文の指導にあたって下さった中村陽一先生（立教大学大学院教授）、お二人からの、厳しくも温かいご指導がなければ、この研究を行うことができませんでした。お二人の先生には、あらためて感謝を申し上げます。

尚、本稿は福祉教育・ボランティア学習学会（第21回年次大会、2015年11月15日）にて報告した自由研究発表の内容を、あらためてくわしく検討したものであることも、あわせて付記しておきます。

7 引用文献

- ・長谷川利(1981)「ジュニアリーダー養成講習会」『あしあと』東京都練馬区青少年委員会, pp.30~32
- ・東京都練馬区青少年委員会ジュニアリーダー企画委員会(1983),『青少年委員会30周年記念誌』pp.23~27
- ・遠藤輝喜(1997)「少年教育行政における子どものリーダー養成に関する考察(1)~東京23区のジュニアリーダー養成事業の調査から~」,武蔵野女子大学紀要編集委員会,武蔵野女子大学紀要32号, pp.193-207
- ・遠藤輝喜(2003)「少年教育行政における子どものリーダー養成に関する考察(2)~1995年調査からの追跡調査を通して~」,武蔵野女子大学紀要編集委員会,武蔵野女子大学文学部紀要第4号, pp.55-67
- ・田中治彦(2015)「ユースワーク・青少年教育の歴史」東洋館出版社, p.210